

パレスチナ難民問題の起源について

－ダレット計画をめぐる論争－

The Origin of the Palestinian Refugee Problem

－ A Controversy around Plan Dalet －

佐藤 寛 和

Hirokazu SATO

はじめに

1948年のイスラエル建国以来、イスラエルとパレスチナ・アラブの間では数多くの武力衝突が繰り返されてきた。時折、和平の機運が生じてはまた紛争が激化するという堂々巡りである。そのなかで、1993年のオスロ合意の締結は、両者にとって和平プロセスを現実のものとして捉えることのできる出来事であった。両者は初めてお互いの存在を認め合い、武力闘争ではなく交渉による紛争解決を約束したからである。しかし2000年以降、このような和平のムードは崩壊することになる。特に2001年のアメリカ同時多発テロは両者の関係悪化を決定的にした。以降、イスラエルはパレスチナ人の闘争をテロと同一視し、パレスチナ人に対する激しい制裁を行なった。一方のパレスチナ人もイスラエルに対して報復を行なうという、まさに「憎しみの連鎖」の様相を呈しだした。そしてこのような状況の下では現在に至っても終結の兆しが見えてこない。はたして彼らの内に存在する紛争の原因、または和平を阻害している問題とは何であろうか。

パレスチナ紛争の係争点としては、聖地エルサレムの帰属問題、双方の国境線画定およびユダヤ人入植地問題、水などの資源問題、パレスチナ国家の独立問題、そしてパレスチナ難民問題が挙げられようが、本稿はパレスチナ難民問題を考察する。なぜならこの問題はイスラエル建国の正当性や、ひいては原罪性を問う事象であると考えられるからである。パレスチナ難民は自発的に去ったのか、それとも強制されて難民となったのかについてさまざまな歴史研究が発表されてきた。イスラエル人歴史家 Simha Flapan¹ は、パレスチナ人の難民発生について以下のように述べる。

パレスチナ・アラブ人の大移動は、強制と自発の両方で、1947年11月29日の国連分割案の発表で始まり、1949年の夏に休戦協定が調印された後になっても続いた。60万人から70万人のパレスチナ・アラブ人が、ユダヤ国家として割り当てられた地域、もしくは戦争中にユダヤの軍隊に占領された

¹ シオニスト左派政党マバムの書記長を務めたこともある歴史家。主著には、イスラエル建国の神話化のプロセスをテーマにした *The Birth of Israel: Myths and Realities*, Pantheon Books, (1987) がある。

り、後に事実上イスラエルに併合された地域から追放されたり避難したりした²。

この問題と向き合うことは、イスラエルが中東地域でアラブ諸国と共存するうえで避けられない問題である。なぜなら、パレスチナ難民の帰還権や補償問題が、いまだに両者の政治外交上の対立点となっているからである。1948年5月15日までに、約38万人のパレスチナ人が難民となった。戦争終結までにその数は2倍になり、国連の報告では75万人という難民数に達した。現在における世界のパレスチナ難民の総数は462万人（2008年6月末）に達している。パレスチナ人の総数が1034万人（2007年末）であるから、その約4割が難民というわけである³。

これまでイスラエル社会とパレスチナ社会では、1948年に発生した出来事について、互いに異なる歴史の「語り」が存在してきた。1948年の出来事は、イスラエルでは「独立戦争」と呼ばれる一方、パレスチナではアラビア語で大破局を意味する「ナクバ」と呼ばれてきた。このふたつの名称に彼らの理解の対照性が示されている。イスラエルは建国後、パレスチナ人の追放の事実や追放政策の存在を否定してきた。1948年の戦争はアラブ諸国によるイスラエル殲滅戦争であり、自国の行動は正当防衛であるとする国民的記憶が「語り」のなかで建国を正当化し、パレスチナ難民の問題と「ナクバ」の記憶を否定してきたのである。対するパレスチナ側は、イスラエル建国のためにパレスチナ社会が破壊され、大量の難民が発生したという。元来、シオニズムには、アラブ人を移送する概念が組み込まれており、この概念こそが「ナクバ」を引き起こした要因であるという「語り」が存在してきた。

以上のような両者の「語り」を検討するうえで、非常に重要な作戦がイスラエル建国直前のシオニストによって立案されていた。それは「ダレット計画」(Daletとはヘブライ語で「4番目」を意味する)と呼ばれるものである。ダレット計画は、ハガナ⁴が1948年3月に、アラブ人の侵入に備え作成したとされる計画である。ハガナの作戦将校で、ダレット計画立案に携わったYigael Yadinによれば、ダレット計画の目的はユダヤ人国家の領土を掌握し、その境界線を防衛することであり、ユダヤ人国家の領域外にあるユダヤ人入植地とユダヤ住民を抱える地域を掌握することであった。ハガナの公式の歴史書である *Sefer Toldot Hahaganah* は、ダレット計画の目的を次のように示している。

ダレット計画の目的は、ユダヤ人国家の領域の支配を達成すること、そして、その境界を防衛することである。また、この計画は、ユダヤ人国家の内外の拠点から行動しているアラブの正規軍、准正規軍、小規模な兵力に対抗して、(ユダヤ人国家の)境界線の外部に位置したユダヤ人入植地と

² Simha Flapan, "The Palestinian Exodus of 1948." *Journal of Palestine Studies*, (summer 1987), p.3.

³ 外務省のホームページから参照。<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/plo/kankei.html> (最終閲覧日2010年12月23日)。

⁴ ヘブライ語で「防衛」。シオニスト移民によって創設された自警団およびイギリス軍の「ユダヤ軍隊」除隊者らを母体に組織されたイシューヴの軍事組織。イスラエル国防軍の前身となる。

その密集地の領域の支配を獲得することも目的である⁵。

このようなハガナの説明に従えば、ダレット計画は単なる軍事上の防衛作戦である考えられる。しかし、ユダヤ人にとって安全保障上、重要であると考えられた地域に隣接するアラブ人村や町は、ダレット計画によって占拠されることが容認されていた可能性がある。ここにおいて多くのアラブ人村が破壊され、村民の追放という事例が発生した。そのため、ダレット計画については、ユダヤ人自衛のための計画だったのか、それとも本質的にパレスチナ人追放のための計画であったのか、論争が繰り広げられてきたのである。

これまでのダレット計画に関する先行研究は、その解釈に関して大きくふたつに分けられる。ひとつは、ダレット計画とはイギリスがパレスチナから撤退し、イスラエル建国が宣言された後のアラブ人の侵入に備えて、ユダヤ人が自らの入植地を防衛するという計画であったというものであり、もう一方は、可能な限りユダヤ人国家内および入植地付近のアラブ人を追放するためのマスタープランだったというものである。現在までこのどちらが正しい見解であるかという点について決着するには至っておらず、検討の余地は多い。

パレスチナ難民問題研究の先駆者である Walid Khalidi は “*Why Did the Palestinians Leave ?*” (Middle East Forum, July 1959) と “*Plan Dalet: Master Plan for the Conquest of Palestine*” (Middle East Forum, November 1961) という論文でパレスチナ難民発生経緯とダレット計画の本質を明らかにしようと取り組み、後の「新しい歴史家」にも影響を与えた。1980年代になると1948年の難民発生に関する神話を壊し、主流派の「語り」に挑戦した「新しい歴史家」が出現する。彼らは1990年代に活性化したポスト・シオニズム論争⁶を牽引することになり、これまでのイスラエル国家による建国にまつわる説明を根本から問い直す契機となった⁷。その先頭に立ったのが *The Birth of the Palestinian Refugee Problem* を出版した Benny Morris である。彼はこれまでのアラブ側、イスラエル側、両者の政治的プロパガンダに挑戦を試みた。Morris がこれまで広く流布されてきた両者の主張を特定の要因のみを強調する恣意的な議論であると排し、イスラエル側の公式見解の誤りを指摘し

⁵ Walid Khalidi, “Plan Dalet: Master Plan for the Conquest of Palestine. APPENDIX B, Text of Plan Dalet (Plan D), 10 March 1948: General Section.” *Journal of Palestine Studies*, (Autumn 1988), p.24.

⁶ 主要なポスト・シオニズム論争は以下の5点が挙げられる。第一がパレスチナ難民問題の発生をめぐって、第二がシオニストとトランスヨルダンの共犯関係をめぐって、第三はイギリスのパレスチナ政策をめぐって、そして第四はアラブ諸国の戦争目的をめぐって、第五は1950年代初頭のイスラエルとアラブ諸国との和平交渉の失敗をめぐってである。臼杵陽「イスラエル現代史における修正主義」『シリーズ歴史学の現在・4、歴史における修正主義 歴史学研究会編』青木書店、2004年、58頁参照。

⁷ イスラエル建国期の難民問題に関する研究を促進した要因は、イスラエルのアーカイブス史料の公開基準を定めた「国家アーカイブス法」により実証主義的な史料研究が可能になったことである。行政・外交関係文書は作成の30年後から、軍事関係文書の公開は原則50年後から閲覧可能になった。公開された史料を用い、実証的な研究を行なった研究者は「新しい歴史家」と呼ばれ、1948年のイスラエル建国史に批判的な視点を当てることになった。

たことは、イスラエル社会に衝撃を与えた。Morrisの後、「新しい歴史家」のなかでも最左派に位置する Ilan Pappé が *The Ethnic Cleansing of Palestine* のなかで、1948年を記述する新しい方法として「民族浄化」という視点を提起した。Pappé は「難民は戦争の結果として発生した」という Morris の考えを覆し、戦争はまさにアラブ人を追放する手段だったと述べ、アラブ人を追放するというアイデアがシオニストの思想に内在していたということを主張したのである。このような Pappé の言説に対して、保守的な歴史学者である Yoav Gelber は反論を行なった。彼はダレット計画の自衛的な側面を論じ、「新しい歴史家」の解釈と比較検討するうえで、重要な見解を示した。

本稿では以上のような先行研究を考察することで、このダレット計画なるものが難民発生といかなる関連を有していたかを考察する。特に、ポスト・シオニズム論争のなかで「新しい歴史家」たちの実証的研究が、パレスチナ難民の発生においてこれまで語られてこなかった新たな「語り」をイスラエル人およびパレスチナ人に提供したことを重視し、「勝者」の側とは異なるパレスチナ難民問題の新たな視点を提示する。

1. 戦争原因説

「新しい歴史家」の代表的存在である Benny Morris が著した *The Birth of the Palestinian Refugee Problem* (1988) は、難民問題に関するその後の論争の発火点となった。Morris によれば、アラブ人の指導者がパレスチナのアラブ人を彼らの家や村から去るように命令を発したことの証拠や、ラジオや報道機関がパレスチナ人に避難するよう命じる活動のいかなる形跡も存在せず、他方でイスラエル側についても、パレスチナ人の組織的な追放のために上官に当たる者から正式に言い渡された包括的な命令は無かった。パレスチナ難民問題は、主にアラブ人やユダヤ人の不安や第一次アラブ-イスラエル戦争を特徴付ける長期化した激しい戦闘に伴う副次的なものであり、ユダヤ人やアラブ人の故意によるものではなかった。ユダヤ人やアラブ人の難民問題についての「語り」は、それぞれの軍事的指導者や政治家の責任回避のための意図的な創作であった。彼の解釈では、ダレット計画とは5月15日もしくは後日に予期される侵入に対して新興のユダヤ国家とユダヤ国家の領域外にある「入植地圏を危険から守るための青写真」であった。

現地アラブ住民や外国（アラブ諸国）の非正規軍に対する戦闘は、侵入してくる軍隊を打ち破る見込みがあるならば、何よりも勝利しなければならなかった。道路での戦いに勝利するため、ハガナはアラブ人に支配され戦争行為の拠点となっていた村と町を制圧しなければならなかった。制圧とはすなわち村民の降伏、もしくは人口減少と破壊行為を意味していた。ダレット計画の本質は、予想される侵入の前に、ユダヤ住民の主要な密集地と確保している将来のユダヤ国家の国境との間の領土的一体性を確立するために、将来のユダヤ国家の領域の外部に敵意を抱く住民や潜在的に非友好的な勢力を排除することであった。ハガナはほぼすべての村民を積極的、もしくは潜在的に敵意

を抱く人々と見なした⁸。

Morrisの主張では、パレスチナから、もしくは新興のユダヤ人国家の領域からアラブ人を追放するシオニストの計画は戦争以前に存在しなかった。パレスチナ難民問題は戦争そのものから生じたのであり、ユダヤ側、アラブ側の双方が意図したものではなく、あらかじめ考慮された、体系的な追放政策は存在しなかった。追い立て、追放、そして大量虐殺の実行は、戦争とイスラエル兵たちの間に広く認められた、ある種の気分の結果である。それらは、その場での場当たりの対応であって、上官から指導されたものではない。ダレット計画はあくまで自衛のための計画であり、その過程で発生した難民は予期されたものではなく、戦争状態では不可避だったのである。Morrisは、パレスチナ難民発生に関する従来の議論はイスラエル側もパレスチナ側も史料的に実証できないとして、難民発生の責任を特定できなかった。

しかし、その一方でMorrisは、ダレット計画によりパレスチナ人が結果として被った影響については以下のようにはっきりと述べている。

ダレット計画はパレスチナのアラブ人の追放のための政治的な青写真ではなかった。それは軍事的な動機によって決定され、軍事的な目的を成し遂げることに連動していた。しかし戦争の本質と住民の混合を考慮すれば、実際問題として、ユダヤ国家の内部やその国境線を安全にすることは、敵対的な軍隊と非正規軍を受け入れた村の人口減少と破壊を意味した。この計画は、'積極的に武装した軍隊が基地として利用することを防ぐことを目的に、我々の防衛線の背後、もしくは近郊に位置する敵の居留地に対する作戦'を要求した。パレスチナの規模と戦争の本質を考慮すれば、予想されたユダヤ国家の領域内と近郊のほぼすべての村は、主要な道路もしくは国境地帯に位置し、またアラブの軍隊の侵攻線もしくはその近くに位置していた。ダレット計画は村や町に征服や永久的な占領、もしくは破壊をもたらした。その村を包囲して、武器や非正規軍を捜索することが指示された。抵抗がある場合、その村の武装した兵士は処分され、その住民は強制追放された。抵抗が無い場合、その村は武装解除され、守備隊が置かれた。特に我々が永久的に支配することができない敵対的な村の一部は破壊されることになった（残骸を燃やし、解体し、また地雷を敷設することで）。ハガナは、それらの村が反イシューヴ（イシューヴとはパレスチナのユダヤ人社会を意味する）の拠点として新たに利用されることを防ごうとした⁹。

Morrisの功績は、これまでイスラエル建国史の「語り」ではタブーであった、ユダヤ人による暴

⁸ Benny Morris, *The Birth of the Palestine Refugee Problem Revisited*, Cambridge University Press, 2004, pp. 163-164.

⁹ *Ibid.*, pp. 164-165.

力行為・追放という事実に言及したことにあり、このことによって、イスラエル国家はパレスチナ人の犠牲の上に成り立っているのか否かという、きわめて倫理性を帯びた問題がイスラエルで喚起されることとなったことは確かである。Morrisの研究を受けて、イスラエルがアラブ諸国に勝利したのは軍事力の優位に基づいた、当然の帰結だという説明がなされるようになった。しかしながら、Morrisの説は前にも述べたように、ダレット計画そのものは防衛計画であり、パレスチナ人を当初から意図的・体系的に追放するものではなく、難民の発生はひとつの戦争の随伴的帰結にすぎないものであったとする点で、「戦争原因説」に位置付けられるものであった。

2. 計画的追放説

2-1 シオニズムに潜む“追放”の概念

さて、本題に入る前に、イスラエル建国以前におけるシオニストのパレスチナおよびアラブ人への対応を見てみよう。なぜなら、「計画的追放説」はシオニズムとダレット計画との密接な関係の存在という説に根拠を置いているからである。

19世紀、東欧のシオニストは、当時の多くの民族主義者の特徴を共有していたものの、他の民族主義的運動とは異なり、自らのものと呼べる土地を所有していなかった¹⁰。彼らは、領土を捜し出さなければならなかったのである。そこで彼らはパレスチナに目標を定めたのであるが、その地にはすでにアラブ人が居住していた。20世紀初頭、イギリスの作家Israel Zangwillが定式化した、“民なき土地に土地なき民を”というシオニズムの標語は有名であるが、これが虚言であることをシオニスト自身も気付かざるを得なくなる。原住民は簡単に“テントを抱えて消え去る”であろうというシオニズム初期の願望に基づいた信念は、まもなくより現実的な評価に取って代わられた¹¹。つまり、アラブ人の存在しないユダヤ人国家を創設するためには彼らアラブ人を他のどこかに移送しなければならないという議論が登場したのである。シオニズムの父と称されるTheodor Herzlは、のちに現実にかかるはずの事柄をかなり冷徹に予見しつつ、原住民問題を処理する方法を日記に詳細に書き綴っていた。彼によれば、貧しい原住民大衆の土地は収用されねばならず、‘土地収用と貧困者排除の過程は、慎重かつ用意周到に行なわれる必要がある’、そのためには‘文無しの住民たちに寄寓先で職を斡旋し、我々自身の国での勤め口を閉ざすことによって、彼らを密かに国境線の外へ運び出してしまわねばならない’¹²のであった。Herzlのような移送の概念は、シオニスト運動内の大イスラエル主義者¹³もしくは過激主義者にのみ抱かれていたわけではない。それどころか、移送の概念は、右派の修正主義

¹⁰ Walid Khalidi, “Plan Dalet: Master Plan for the Conquest of Palestine.” *Journal of Palestine Studies*, (Autumn 1988), p. 9.

¹¹ Nur Masalha, *Expulsion of the Palestinians: The Concept of “Transfer” in Zionist Political Thought 1882-1948*, Institute for Palestine Studies, 1992, p. 1.

¹² エドワード・W・サイード（杉田英明訳）『パレスチナ問題』みすず書房、2004年、104頁。

¹³ イギリスによる委任統治領パレスチナ全土がイスラエル領であるべきだと信じるシオニスト。

者¹⁴から左派の労働党員にまで採用され、ユダヤ国家の創設者たちで言えば、Chaim WeizmannやVladimir JabotinskyからDavid Ben-GurionやMenahem Ussishkinまでが、何らかの形で移送の概念を支持し主張していたのであった¹⁵。ユダヤ国家実現に向けて政治的シオニズムが主流となると、シオニストはアラブ人を非存在化しつつ彼らの追放さえもイスラエル建国のためにはやむを得ないとする志向を表すようになる¹⁶。パレスチナ人歴史学者Nur Masalha¹⁷は以下のように述べる。

移送の概念は、シオニスト運動およびイシューヴの指導者の戦略的な思考のなかで、パレスチナの“アラブ人問題”への解決策として初めから中心的な位置を占めてきた。実際、移送の考えは、パレスチナの初期のシオニスト入植地や政治的シオニズムの起源と同じほど古いものである。それはシオニスト運動の究極的目的の論理的な帰結と言ってもいいだろう。というのは、その究極的な目的とは入植と土地の獲得を通じて、言い換えれば、国土の急激な民族的、宗教的、人口の変容を通じてのユダヤ国家を創設することであった¹⁸。

シオニストが推進したパレスチナでのユダヤ人入植地の拡大は、近隣アラブ人とユダヤ人コミュニティとの間に摩擦を生じさせた。原住民が、ロシア語やイディッシュ語を話す人々やアッラーを拒絶する外国人の流入に憤慨し、彼らの生活習慣に関する文化的・宗教的な転覆、物理的侵略、さらには失業を恐れ始めたからである¹⁹。シオニストの論理は非常に単純なものであった。すなわち、シオニストが選んだ土地の原住民に課せられた多くの困難よりも、ユダヤ人問題に対して提供されたその

¹⁴ アラブ人との共存の試みを批判し、アラブ人との分離・対決を主張したシオニスト。後のリクードなどイスラエル右派の源流となった。

¹⁵ Masalha, *op. cit.*, p. 2.

¹⁶ アラブ人に対する圧力が増すなか、シオニストのなかにもアラブ人との共存を唱え続ける“イフード”というグループが存在したことは注目すべきであろう。主要なメンバーには、ヘブライ大学の教授を務めていたMartin Buberや同学長のJudah Leon Magnesらが含まれていた。イフードの提案は、‘パレスチナ国家建設にとっても、社会・経済・文化・政治のあらゆる分野でユダヤ人・アラブ人双方の世界が協力する上でも、両民族の結束が不可欠である’として、パレスチナにおけるユダヤ人・アラブ人双方の独立を尊重する二民族国家論を主張していた。パレスチナを「アラブ民族」「ユダヤ民族」双方の民族国家としてつかみとろうとするイフードの立場も、パレスチナにユダヤ人国家の誕生を拒否するアラブ側とは相容れないものだったが、少なくとも、アラブとの共存を不可欠と考えるその立場には、パレスチナでユダヤ人が平和に暮らす可能性を模索する姿があった。しかし、このシオニスト平和勢力は、シオニスト主流派がユダヤ人国家実現へ向けてパレスチナのユダヤ人社会での支持を拡大させていくなかではあまりに微力であり、次第に政治的影響力を喪失させていった。

¹⁷ ロンドン大学で政治学の博士号を取得した中東政治史研究者。主著には、*Expulsion of the Palestinians: The Concept of“Transfer”in Zionist Political Thought 1882-1948*, Institute for Palestine Studies, (1992) がある。同書において彼は‘ダレット計画は、アラブ人の町の占領とその“住民の追放”に関する詳細な対策を含んでいた’‘ダレット計画はアラブ人の追放のための青写真ではなかったけれども、この計画には政治的なイデオロギーである移送の概念と強く結びついており、戦場での効果的な政策を提供していた’と主張した。

¹⁸ Masalha, *op. cit.*, p. 1.

¹⁹ Morris, *op. cit.*, p. 9.

土地のシオニストの占領がもたらした解決策はより重要であるということである。これは、“より少ない悪の尺度”[The yardstick of the lesser evil](この尺度は意識して、もしくは無意識に適用された)と呼ばれ、犠牲者の苦痛を矮小化することや最終的には覆い隠すシオニストの道徳上のアリバイとなった²⁰。Ilan Pappeは入植当初のシオニストのパレスチナ観を次のように述べている。

1882年に初めて移住した多くのシオニストにとって、パレスチナは占有された土地などではなく、空虚な土地であると考えられていた。つまり、そこに住んでいた現地のパレスチナ人はシオニストに主として無視されるか、そうでなければ自然の障害物の一部であったり、征服されたり除去されるような存在であった。岩石もパレスチナ人も、また何であれ、シオニスト運動が熱望した土地の民族的解放に立ちはだかるものは何もなかった²¹。

アラブ人を非存在化しようとする過程は、ユダヤ民族基金²²(以下JNF)の活動とJNFの入植部門の指導的地位にあるYosef Weitzと密接に関係した。Weitzは典型的なシオニスト植民地主義者であった。当時の彼の主な優先事項は、不在地主から購入した土地に居住するパレスチナ原住民の追放を促進することだった²³。Weitzは1940年に以下のように述べている。‘アラブ人を移送させることは我々の権利であり、アラブ人は出ていくべきだ’²⁴と。そこで重要となったのが、シオニストの専門家たちがパレスチナの村々について作成した詳細なファイルの存在である。ファイル作成の提案は、Ben-Zion Luriaというヘブライ大学出身の歴史家によってもたらされた。Luriaは、あらゆるアラブ人の村々の詳細な記録簿の所有が、どれほど有益であるかを指摘し、‘この記録はパレスチナの土地取得に多大な助けとなるであろう’とJNFに提案した²⁵。1930年代後半までに、この‘アーカイブ’はほぼ完成したものとなっていた。正確で詳細な情報はそれぞれの村の地勢上の位置、アクセス方法、土壌の質、水源地、主な収入源、社会政治的な構成、信仰宗教、ムフタル(村長)の名前、他の村々との関係、個々の男性の年齢(16歳から50歳まで)など多岐にわたって記録された。重要な項目は1936年の反乱²⁶における村々の参加の程度を判断した(シオニストの計画に対する)‘敵意’の見出しであった。それらは1936年の反乱に携わった者の全員、およびイギリスと戦って亡くなった者のいる家族のリストで

²⁰ Khalidi, *op. cit.*, *Journal of Palestine Studies*, (Autumn 1988), p. 9.

²¹ Ilan Pappe, *The Ethnic Cleansing of Palestine*, Oneworld Publications, 2006, p. 11.

²² 1901年に設立した、ユダヤ移民社会が計画的にパレスチナの土地を購入するための基金。JNFによってシオニストは不在地主から多くの土地を購入した。不在地主の農地で働いていたアラブ人は職を失い都市へ流入し、ユダヤ人とアラブ人の摩擦を助長することになった。

²³ Pappe, *op. cit.*, *The Ethnic Cleansing of Palestine*, p. 17.

²⁴ *Ibid.*, p. 23.

²⁵ *Ibid.*, p. 17.

²⁶ 1936年4月、アラブのゲリラ部隊によるユダヤ人輸送隊襲撃をきっかけにアラブ人とユダヤ人の間で暴力の応酬が拡大した事件。

あった。特別な注意はユダヤ人を殺害したと考えられたパレスチナ人に向けられた。1948年にこれらの決定的な情報のひとつが大量殺戮や拷問に繋がる、アラブ人の村々での最悪な残虐行為を助長したのである²⁷。1943年以後の時代のファイルには畜産、耕作地、農園の樹木の総数、果樹園の質（それぞれの木々の一本までも）、各村の平均的な家族人数、車両の数、商店の所有者、各村の職人の名前や作業場のメンバーおよび彼らの技術などの詳細な記述が含まれていた。後になって、詳細な項目には各一族やその一族の政治的関係性、名士とありふれた小作農との間にある社会階層、委任統治政府で働く公務員の名前などが加えられた²⁸。村のファイルの最後の更新は1947年に行なわれた。そのファイルでは、それぞれの村における指名手配人のリストを作成することに重点が置かれた。1948年、ユダヤ人の軍隊は、彼らが村を占領してすぐに実行した捜索および検挙活動にこのリストを利用したのである²⁹。

2-2 Walid Khalidiの主張

Walid Khalidiは1948年のパレスチナの破壊を中心に、シオニストによるパレスチナ侵攻やイスラエル・アラブ問題を研究し、「新しい歴史家」が出現する以前からイスラエルの「語り」に挑戦してきた人物である。Morrisによる説明は、この1948年の戦争に関する第一人者を納得させるものではなかった。Morrisの研究が発表された後も、Khalidiは依然としてダレット計画をパレスチナ人の追放に関わるマスタープランであり、パレスチナ人コミュニティを破壊する多くの計画のうちの決定的なものとして主張し続けた。

“Plan Dalet”、つまり“Plan D”とは、1948年4月から5月上旬にかけて、パレスチナの各地でシオニストの開始した一連の攻撃に示されているような軍事行動の全般的計画を、シオニスト最高指導部がそのように呼んだ名称であった。パレスチナ・アラブ人のコミュニティの破壊とパレスチナ・アラブ人の大多数に追放と窮乏化を引き起こしたこれらの攻撃は、イスラエル国家が創設される場所に軍事的な既成事実を達成するため目論まれたものであった³⁰。

この問題に関する伝統的なシオニストの見解は、パレスチナのアラブ人は彼らの指導者による命令放送に従って立ち去ったというものであった。Khalidiによると、このような神話は、パレスチナ人自身の運命についてパレスチナ人に責任を負わせる手段として、イスラエルの弁護人によって効果的に流布された。アラブ人の避難命令に関するシオニストの強調は、難民に関する道徳的責任をアラブ

²⁷ Pappe, *op. cit.*, *The Ethnic Cleansing of Palestine*, p. 19.

²⁸ *Ibid.*, p. 20.

²⁹ *Ibid.*, p. 21.

³⁰ Khalidi, *op. cit.*, *Journal of Palestine Studies*, (Autumn 1988), p. 8.

人自身に転嫁させ、彼らを守勢に回させ、論駁の負担を彼らに負わせる、巧妙なプロパガンダの戦略なのである³¹。彼は、イギリスとアメリカの近東監視局のバックナンバー・ファイルとBBCが記録しているアーカイブスにはアラブ人の避難命令のいかなる手がかりも存在せず、またアラブのラジオ局がパレスチナ人に留まれと命じた手がかりも存在しなかったと結論付け、この神話に挑戦したのである。

Khalidiによれば、シオニストの軍隊の計画立案は、状況に応じて、その事態に適した2段階の戦略に基づいていた。第一局面である、ダレット計画以前に立案された“Plan Gimel”（Gimelはヘブライ語で「3番目」を意味する）もしくは“Plan C”におけるその目標は、提案されたアラブ国家の領域にあるユダヤ人入植地との関係を維持すると同時に、パレスチナのアラブ人に対して至る所での絶え間ない圧力を継続することであった。パルマツハ（ハガナの突撃隊）の司令官 Yigal Allon はユダヤ人入植地の維持に関する二つの重要な理由を挙げている。第一は、敵が多く民間密集地に侵入することを逸らすための絶対的な必要性、そして第二は、攻撃下に軍隊（すなわちユダヤ軍）が孤立していた入植地を結合させるために、直ちに攻撃態勢を取ろうとするときの必要性である。シオニストの戦略の第二局面は、イギリス軍が撤退するに伴い、それまでの委任統治領を占領するための徹底的な攻撃と、その領土を確保することである。論理的にも作戦的にも、これは、効果的な報復でアラブ人に妨害されない限り、自発的には中断しそうなない継続的な行程であった。この第二局面がダレット計画の本質だったのである³²。

ダレット計画は、最初の *Nachshon* 作戦から *Schififon* 作戦まで13の全面的な特別作戦を実施した³³。

³¹ *Ibid.*, p. 9.

³² *Ibid.*, pp. 15-16.

³³ ダレット計画は以下のような手順で進められた。

*1. *Nachshon* 作戦：1948年4月1日—

テルアヴィブからエルサレムに至る回廊を分割し、それによりアラブ国家の主要部分をふたつに分断すること。（失敗）

*2. *Harel* 作戦：4月15日—

Nachshon 作戦の継続であるが、特にラトゥルン近郊のアラブ村落群に集中していた。（失敗）

3. *Misparayim* 作戦：4月21日—

ハイファを攻略し、そのアラブ住民を敗走させること。（成功）

*4. *Chametz* 作戦：4月27日—

ヤーファ周辺のアラブ村落群を破壊し、それによりヤーファ攻略の準備としてパレスチナの他の地域との物理的な接触を断つこと。（成功）

*5. *Jevussi* 作戦：4月27日—

エルサレムをとりまく環状のアラブ村落群を破壊し、エルサレムから北に通じるラマツラー—エルサレム間の道路、東に通じるイェリコー—エルサレム間の道路、南に通じるベツレヘム—エルサレム間の道路を支配することによりエルサレムを孤立させること。この作戦によって、エルサレム全市を陥落させ、同時にヨルダン川西岸のアラブの地位を維持できなくさせるはずである。（失敗）

6. *Yiftach* 作戦：4月28日—

ガリラヤ東部からアラブ人を一掃すること。（成功）

そのうち8つの作戦が、国連によってシオニストに与えられた地域の外、つまりアラブ国家に割り当てられた領域で行われたことは注目すべきであろう³⁴。そして、ダレット計画は物理的な攻撃だけでなく、心理的な作戦もアラブ人追放にとって効果的であった。

私 (Allon) は、様々な村でアラブ人と付き合いのある、あらゆるユダヤのムフタルを集め、アラブ人の耳に、ある言葉を囁くよう彼らに頼んだ。その言葉とは、'多くのユダヤ人の援軍がガリラヤに到着し、Hulehにある村々のすべてを焼き払おうとしている'というものであった。ユダヤのムフタルは、“アラブ人の友人”として、時間がある間に避難するようアラブ人に勧めるであろう。そして、もう避難すべき時だというその噂は、Hulehのあらゆる地域に広まった。アラブ人の逃走は無数に及んだ。[……] 現地での攻撃的な戦い（すなわちPlan CとD）のおかげで、ユダヤ人の領土の継続性は成し遂げられ、アラブ人の地域に我々の軍隊を進出させることも達成された。大多数に及んだアラブ人の避難は、広大な領土を管理しようとする我々の軍隊を容易にし、また、あらゆる労力を難民の受け入れと組織化に費やした敵軍には負担となった³⁵。

Morrisはアラブ人による避難命令が存在しないことを明白に示したものの、パレスチナ人の大移動については歴史的な真空状態にあると主張して、明確な結論を避けた。また、Morrisはアラブ住民の“移送”に関して主要なシオニストの団体における1948年以前の議論に言及したものの、この議論とダレット計画の間の繋がりはないと考えていた。Khalidiは、このようなMorrisの見解を批判し

7. *Matateh* 作戦：5月3日—

ティベリアスからガリラヤ東部を結ぶアラブ村落群を破壊すること。(成功)

*8. *Maccabi* 作戦：5月7日—

ラトゥルン近郊のアラブ村落群を破壊するとともに、裏をかいてエルサレムの北、ラマッラー地区に進出すること。(失敗)

9. *Gideon* 作戦：5月11日—

ベイサンを占領し、近隣の半定住ベドウィン集団を追放すること。(成功)

10. *Barak* 作戦：5月12日—

ネゲヴへの経路にあるブレイルの近隣のアラブ村落群を破壊すること。(部分的に成功)

*11. *Ben Ami* 作戦：5月14日—

アッカを占領し、ガリラヤ西部のアラブ人を一掃すること。(成功)

*12. *Pitchfork* 作戦：5月14日—

エルサレム新市街のアラブ居住区域を占領すること。(成功)

*13. *Schifon* 作戦：5月14日—

エルサレム旧市街を占領すること。(失敗)

*印のついた作戦が、アラブ正規軍が侵入する前に、国連によってアラブ人に割り当てられた領域で実行された作戦である。

Khalidi, *op. cit.*, *Journal of Palestine Studies*, (Autumn 1988), pp. 17-18.

³⁴ Khalidi, *op. cit.*, *Journal of Palestine Studies*, (Autumn 1988), p. 18.

³⁵ *Ibid.*, p. 19.

ている。

Morrisは、ダレット計画における連続する軍事的作戦を結び付けている明白で直線的な力学を、いわば時間の次元における同時発生を通じてのみ相互に偶然的に関連している、立体的な配置の断片であると見なした。彼の観点に基づくと、強制的なアラブ住民の“移送”と、彼らの土地の強奪および新たなユダヤ国家に連れてくるよう計画されていた、成されねばならない何十万のユダヤ人を収容することの間には関係性は存在しない。Morrisは勇敢にも、彼が非常に注意深くリストアップした369のパレスチナ人の村々の大部分について暴力や恐怖感による避難が存在したことを認める。しかし彼は、潜在意識的に、この道徳的重荷を、侵略者ではなく、抵抗することや狼狽することでアラブ人自身を永久的な追放に至らせた被侵略者に置いた。もしパレスチナ人の村々が、彼ら住民の帰還を防ぐための命令として、また既存のユダヤ人入植地と新たなユダヤ人移住者の間でパレスチナ人の農地を分配するための命令として爆破されたのなら、これはイデオロギーの、態度の、動機の、もしくは戦略的な前例の無い単なるあと知恵であり、急ごしらえした新基軸であり、素早い閃きである³⁶。

このように、KhalidiはMorrisよりもダレット計画をより重要なものと考えており、ダレット計画がパレスチナのアラブ人を追放するための政治的な青写真ではないというMorrisの見解とは考えを異にしている。Khalidiにしてみれば、イスラエルの主張を覆そうとしたMorrisでさえ、完全にその神話から自由になっていなかったのである³⁷。

2-3 Ilan Pappéの主張

パレスチナ難民発生とダレット計画の不可分性をKhalidiより強硬に主張したのが、「新しい歴史家」のなかでも最左派として知られるIlan Pappéである。彼は、人が住む地域で戦われたあらゆる戦争が難民問題を生み出す運命にあるという意味において、1948年戦争における難民問題の形成は歴史的な前例と違わないが、1948年戦争には他の事例と区別されるべきふたつの側面があるという。第一に、パレスチナ人の大移動はパレスチナのシオニスト指導者の一部の意図的な活動の結果であること、第二に、ほぼすべてのパレスチナ人は（厳密に言えば90%）は戦争中にユダヤ人の軍隊によって、占領された地域にある彼らの生家から強制的に退去させられたということである³⁸。Pappéはダレット計画を次のように描いている。

³⁶ *Ibid.*, pp. 5-6.

³⁷ Walid Khalidi, "Why Did the Palestinians Leave, Revisited," *Journal of Palestine Studies*, (Winter 2005), p. 42.

³⁸ Ilan Pappé, *The Making of the Arab-Israeli Conflict 1947-1951*, I.B.TAURIS, 1992, p. 87.

ダレット計画はふたつの明確な目的を有していた。第一の目的は、イギリス軍の撤退によって明け渡された軍事施設を獲得することであった。ハガナの行動を容易にするため、親シオニストのイギリス人が情報を提供していた。第二の目的は、可能な限り多くのパレスチナ人をユダヤ国家から排除することであった。その任務を担った軍事勢力はハガナであり、ハガナの隊員は占領しようとする村のリストを受け取っていた。その結果、多くの村は破壊されることを運命づけられた³⁹。

当初、Pappeの主張は現在のようなラディカルなものでは決してなかった。ダレット計画はパレスチナ人の難民化の重要な要素であるが、'ダレット計画の最も重要な目的は、あの時点における内戦の結果に向き合って戦略を提案すること、また正規のアラブの軍隊による、今にも起こりそうな侵入に対する準備であった'⁴⁰。'ダレット計画が避難を引き起こした唯一の要因ではなかったというのは真実であるが、ダレット計画によって例証されたユダヤ人の政策は、多くのアラブ住民の逃避のための最も重要な説明である。これは追放の計画ではなかったが、住民の降伏を要求する計画であった'⁴¹。しかしPappeは2006年に出版された*The Ethnic Cleansing of Palestine*において、パレスチナ難民の発生はシオニストによる事前の明確な追放計画が引き起こしたと主張するようになった。イスラエルは、国際社会では人道に対する犯罪、「民族浄化」を行なったのである。さらに、犯罪に対する責任を倫理的に負っているのはイスラエルであることも強調された。

Pappeはパレスチナ人追放計画に携わった具体的個人名を挙げている。それはイスラエル初代首相David Ben-Gurionである。Ben-Gurion自身、1937年に息子に宛てた手紙で、アラブ人の移送がシオニズムを達成させる唯一の策であると以下のように説得したことが明らかになっている。'アラブ人は出ていかなければならないだろうが、それには戦争のようなものが起きる適当な時が必要である'⁴²と。さらにハガナの軍隊に送った手紙にもBen-Gurionの考えが良く見てとれる。それは、'パレスチナの民族浄化はダレット計画の最も重要な目的であり続けた'⁴³という文言である。

Ben-Gurionは、一連の計画を策定するうえで“Consultancy”⁴⁴という助言者集団に意見を求め、安全保障上の多くの課題を討議した。彼は1946年末までにイギリスがパレスチナから撤退することをすでに察知し、側近と共にイギリスが去った時のパレスチナ人に対して実行される全体的な戦略の策定を開始していた。この計画はPlan Cとして完成した。Plan CとはAとBというふたつの初期の計画の改訂版であった。Plan Aの段階で、イギリス撤退後にパレスチナを掌握するための指針が、既に

³⁹ Ilan Pappé, *A History of Modern Palestine Second edition*, Cambridge University Press, 2006, p. 129.

⁴⁰ Pappé, *op. cit.*, *The Making of the Arab-Israeli Conflict 1947-1951*, p. 91.

⁴¹ *Ibid.*, p. 93.

⁴² *Ibid.*, p. 23.

⁴³ *Ibid.*, p. 128.

⁴⁴ Ben-Gurionと“Consultancy”の関わりは、*The Ethnic Cleansing of Palestine*の第3章以降に詳述されている。

説明されていた。Plan Bは1946年に考案され、両計画はPlan Cへと直ちに融合された⁴⁵。Plan Cは、イギリスが撤退した時にパレスチナ全土で展開される可能性のある軍事活動に向けて、パレスチナのユダヤ人コミュニティの軍事力の準備を意図していた。そのような活動の目的はユダヤ人入植地を攻撃しようというパレスチナ人を阻止することや、ユダヤ人の家屋、道路、交通への襲撃に対して報復することであった。Plan Cの目標は、パレスチナの政治的指導者を殺すこと、パレスチナの扇動者と金銭的援助者を殺すこと、ユダヤ人に敵対的行動をするパレスチナ人を殺すこと、高位のパレスチナ人将校と（委任統治下の）官僚を殺すこと、パレスチナ人の輸送機関を破壊すること、水や家畜などパレスチナ人の生活資源を破壊すること、将来においてユダヤ人への抵抗を援助しそうな近隣のパレスチナ人村を攻撃すること、パレスチナ人の施設やコーヒーハウスや集会場などを攻撃すること⁴⁶など詳細にわたるものだった。Plan Cには、これらの活動の遂行に備えて必要とされるあらゆるデータが集積されており、その中には、前述した村のファイルを見つけることができる。そこには指導者、活動家、“潜在的な人間の標的”、村々の正確な配置などの一覧が載っていた⁴⁷。

Plan C作成後の数カ月のうちに策定されたのが、ダレット計画である。ダレット計画は、シオニスト指導者が将来のユダヤ人国家に向けて着目した所定の領域内にいるパレスチナ人の運命を決める計画となり、彼らの母国からの組織的で全体的な追放を要求した⁴⁸。ハガナによるダレット計画の起草に関して、その青写真には、将来のユダヤ国家の地理的な範囲とその場所に居住している100万人のパレスチナ人の運命の両方の直接の言及を含んでいた。それは、アラブ人村を破壊すること（村に火を放ち、村を爆破し、そしてその瓦礫に地雷を仕掛ける）であり、抵抗がある場合、武装集団は一掃されなければならない、村民は国境の外に追放された⁴⁹。このダレット計画こそが、パレスチナの農村の全ての村民の追放に関するマスタープランであったとPappeは断言する。

1990年代後半にIDF（イスラエル国防軍）のアーカイブスから公開されたイスラエルの公文書は、Morrisがしたような歴史家の主張とは反対に、ダレット計画が曖昧な指針としてではなく、活動のための明白な作戦上の命令として軍団の司令官に言い渡されたものであるということをはっきりと示していた⁵⁰。戦場の部隊に与えられた命令は明確であった。それぞれの軍団の司令官は、占領と破壊が予定されていた村々や近隣のリストを受け取っており、それらの住民は正確な日付に強制退去させられた⁵¹。攻撃のための軍事的目標として計画された“敵の基地”（言い換えれば、敵兵が潜伏しているアラブ人村）は、3つの異なった範疇に分けられた。それは安全区域に位置していた場所（すな

⁴⁵ Pappe, *op. cit.*, *The Ethnic Cleansing of Palestine*, p. 28.

⁴⁶ *Ibid.*

⁴⁷ *Ibid.*

⁴⁸ *Ibid.*

⁴⁹ *Ibid.*, pp. 81-82.

⁵⁰ *Ibid.*, p. 83.

⁵¹ *Ibid.*, p. 82.

わち、ユダヤ人の入植地や全ての戦略的道路の周囲)、アラブ人のパレスチナになるよう国連によって計画された領域の国境線付近、そして国連決議で定められたユダヤ人国家内の場所である。公式のダレット計画は降伏する選択を村民に与えていたにもかかわらず、作戦部隊はどのような理由においてもあらゆる村を例外扱いしなかった。ここにおいて、この青写真は村を破壊し始めるための軍事的な作戦へと転換した⁵²。ユダヤ人の占有が意味しているのは、ひとつの事のみである。すなわち都市と農村の両方でパレスチナ人の家屋、仕事場、土地からの居住民の大量追放である⁵³。ダレット計画の非人道性は、その手段にある。その手段にはパレスチナ人コミュニティの根絶、追放、そして窮乏化が含まれる。ダレット計画は単に将来の指針として用意されたのではなく、ユダヤ人コミュニティの政策立案者の間に認められ、パレスチナ人コミュニティの破壊を含んだパレスチナ全土での戦いにおける、ユダヤ人の成功という志向の存在を反映していた。

パレスチナ人に対する残虐行為は無計画に行なわれたのではなかった。これらの行為はできるだけ多くのパレスチナ人をユダヤ国家から排除しようとするマスタープランの一部であった。ダレット計画はパレスチナでの民族浄化政策のための方策を覆い隠す環境を造りだした。ダレット計画は以下のように実行された。戦場の兵士は上官からの一般的態度によって喚起され、パレスチナの“浄化”についての必要性に関するイシューズの指導者によって形成された意見に動機付けられた。このような意見は、兵士によるパレスチナ人排除という行為に移行されていった。そして兵士は自らの行為が政治的指導者の回想では正当化されるだろうということを知っていた⁵⁴。

1948年3月10日に採用されたダレット計画の最初の目標は、4月末までに占領済みであったパレスチナの中心的都市であった。約25万人のパレスチナ人はこの段階で強制的に追放され、いくつかの大虐殺が発生し、最も有名なものはデイル・ヤシーン大虐殺であった⁵⁵。Pappeは、'ダレット計画の組織的な性質はデイル・ヤシーン村で明白となった'と述べ、ダレット計画とアラブ人村の破壊は密接な関係にあるとしている。デイル・ヤシーン村は、民族浄化されるようにダレット計画で指定された地域内に位置していたため、徹底的に一掃される運命にあった⁵⁶。デイル・ヤシーンで虐殺された人々の数は、約100人から254人までと諸説あるが、ユダヤ人の指導者はデイル・ヤシーンを大惨事の震源地とするため、被害者の数を誇らしげに公表した。これは、もしパレスチナ人が家屋を捨てること、また避難することを拒絶すれば、同様の運命が待っているという、あらゆるパレスチナ人に対する警

⁵² *Ibid.*, p. 88.

⁵³ *Ibid.*, p. 87.

⁵⁴ Pappe, *op. cit.*, *A History of Modern Palestine*, p. 130.

⁵⁵ Pappe, *op. cit.*, *The Ethnic Cleansing of Palestine*, p. 40.

⁵⁶ *Ibid.*, p. 90.

告である⁵⁷。デイル・ヤシーン村事件において中心的役割を果たしたのはイルグンやレヒなどの地下軍事組織であったとされるが、Pappeは、このような残虐行為も主流派によって了解されていた可能性があるという。シオニストが、国際世論や後世の批判を招く恐れのある政策を文書化しただけでなかったことも考慮されなければならない。デイル・ヤシーンの虐殺は、1948年4月から5月にかけて、パレスチナの外部にアラブ人を追いやる重要な役割を演じた。デイル・ヤシーンの虐殺がアラブ人コミュニティに心理的な影響を与え、大移動の触媒としての働きをしたということは、多くの歴史家の争点となっている⁵⁸。Pappeの主張するように、イスラエル側がデイル・ヤシーン村事件のようなアラブ村の破壊を引き起こしたとするならば、ダレット計画の戦略目的は、単にユダヤ人社会の防衛に止まらなかった可能性がある。

Pappeは、Khalidiと同様に、Morrisの難民問題に関する見解について不満を示している。それは、Morrisが、イスラエルの軍事アーカイブスからの公文書に基づき、多くの軍事衝突や多くの軍事活動の期間、特定の村々や町の住居にいるアラブ住民は軍事力により追い立てられ、強制退去させられたということを見出したのにも拘わらず、まるでその反対に、アラブ人を強制退去させるイスラエルのマスタープランは存在しなかったということを力説した⁵⁹からである。Pappeによれば、Morrisは従来の歴史像を修正することはできたとしても、まったく別の歴史像を描くことには失敗した。新たな歴史像の構築に必要なものとして、Pappeはオーラル・ヒストリーの重要性を指摘している。

イスラエルは1948年の戦争という新しい歴史を経験し、またそれについて私は歴史を書いた。しかし文書のみに従って歴史記述をすることは出来なかった。まだ国家がなくアーカイブがないからです。従ってここで、文書がなければアプローチできない、正確な歴史は書けないという実証主義者の方法を採用するわけにはいかない。それまでの6、70年の歴史記述の実践を通じて、口述証言は文書と同様に重要だということを理解するようになっていきます。なぜなら文書は、力を持った政治家によって書かれたものです。一方で口述証言は、トラウマを思い出すわけですから、正統性を持つものです⁶⁰。

さらにPappeは、Morrisによるイデオロギーの転向にも苦言を呈している。Morrisは2004年、イスラエルの「ハアレツ」紙⁶¹でイスラエル側の残虐行為が想定以上であったことを認めたとうえで、「歴史においては民族浄化を正当化する状況がある」とし、「ユダヤ国家は70万人のパレスチナ人の根こそ

⁵⁷ *Ibid.*, p. 91.

⁵⁸ Pappe, *op. cit.*, *The Making of the Arab-Israeli Conflict 1947-1951*, p. 96.

⁵⁹ *Ibid.*, p. 89.

⁶⁰ 田浪亜央江「イスラエルのなかで歴史に向き合うこと：イラン・パペ・インタビュー」『インパクション』第158号、インパクト出版会、2007年、117頁。

⁶¹ イスラエル中道左派の高級紙。占領政策には批判的な論調の記者や論説委員が比較的多いとされる。

ぎなくしては存在しなかっただろう。だから彼らを根こそぎにする必要があったのだ」と述べ、Ben-Gurionの「民族浄化」でさえ国家の安定のためには手ぬるかったと批判した⁶²。PappeはMorrisのこの発言を2000年以降のイスラエル社会全体の右傾化と結びつけ、次のように述べる。

2000年までは、たとえばBenny Morrisは、イスラエルの政策に対してたいへん批判的でした。ところがいまでは、完全に擁護している。過去のことも未来のことも。彼のケースを一般論として考えるなら、興味深いものです。なぜなら彼のたどった転向は、すべてのイスラエル人左派に典型的なものだからです⁶³。

以上のように、Pappeは1948年を記述する新しい方法として、「民族浄化」という視点を提起した。PappeはMorrisの「難民は戦争のために発生した」との考えを覆し、アラブ人を追放するというアイデアはイスラエル建国以前からシオニストの思想に存在しており、戦争はアラブ人を追放する手段だったと明確に位置づけたのである。

3. Pappe説に対する反論

他方、保守的なイスラエル人の見解は「新しい歴史家」の主張にどのような態度をとっているであろうか。本章では、そのような立場の人物の中からハイファ大学の歴史学者であるYoav Gelberを取り上げる。なぜなら彼はPappeなどの「新しい歴史家」とは1948年に関する見解において、対照的な見解を有しているからである。GelberはPappeを「すっかりパレスチナ人のナラティブに改心したイスラエル人学者」と非難し⁶⁴、次のように述べる。

Pappeの言葉のなかで、ダレット計画は、「排他的なユダヤ人国家の創設のための必要条件として、あらゆるアラブ人の存在を排除する、最大限にユダヤ人の領土的一体性を造るためのシオニストの野心である特定のイデオロギーを反映していた」とある。これらの主張は75ページあるダレット計画のひとつの文章上の段落を当てにしたものであり、ダレット計画の多くの側面のひとつに言及したものである。Pappeはこの段落を文脈から切り離し、ダレット計画の本来の仕事が無視し曖昧に

⁶² 森まり子「イスラエル建国とシオニズム」『外交フォーラム』No.245号、都市出版、2008年、57頁。

⁶³ イラン・パペ（ミーダーン編訳）『イラン・パペ、パレスチナを語る―「民族浄化」から「橋渡しのナラティブ」へ』つげ書房新社、2008年、116頁-117頁。

⁶⁴ GelberとPappeは、Teddy Katzという院生による1948年戦争時のタントゥーラ村虐殺事件に関する修士論文をめぐって対立した。Katzを擁護したPappeは、大学側から解雇要求が出されるなど、大学当局や右派系学生から自身の研究に対する妨害を受けた。後にPappeはハイファ大学を退職し、イギリスのエクスター大学に着任した。

している⁶⁵。

Gelberによると、国連によるパレスチナ分割案可決を受けて1947年12月にアラブ住民によって開始された戦闘行為に直面するなかで、1948年3月にエジプトのユダヤ人諜報組織が、おそらくアラブ解放軍によって実行されるであろう“侵攻計画”と思われる文章を手にした⁶⁶。1948年の3月中旬、参謀幕僚によるハガナの計画立案部門がダレット計画として知られる、委任統治終了に向けての全体的な計画を完成させたのは、アラブ側の侵攻計画に対抗するためのものだった。つまりGelberにおいてその計画は、アラブ人追放のための用意などではなく、あくまでアラブ人兵士に対する自衛の措置なのである。その目的は、(1) 分割ラインに従って創設されるユダヤ人国家の境界線を防衛すること(2) 侵入の企てに直面するなかで領土的一体性を確保すること(3) 路上における移動の自由を保護すること(4) 欠かせない日々の活動の継続を可能にすること⁶⁷であった。

Gelberによると、ダレット計画の全体計画は5段階に分けられる。第一にアラブ人の侵入に対して防備を強化することでユダヤ人の支配領域の防衛を促進する。第二にユダヤ人の領域内にあるアラブ人の“地域”を占領することで領土的一体性を創る。第三段階は、ユダヤ人入植地から離れているものの分割の境界線内にある空白地帯の支配権を得るための現地における攻撃的な行動を含み、アラブ人の農村の占領が第四段階として続く。ダレット計画の最高潮は第五段階であり、それは、アラブ人が降伏するまでユダヤ人に割り当てられた領域内のアラブ人の町を包囲することであった。ユダヤ国家の生存が確保されるために、侵入の拠点のような、境界を飛び越える敵に対しての反撃は起こりうる偶発事件であった⁶⁸。

ダレット計画は、ハガナがイギリスによる撤退で即座に押収すべきとした道路、橋、政府の建造物、そして警察の要塞をリストに入れた。これらはダレット計画の自衛的な側面を実施するために不可欠であった。しかしGelberにとって重要なのは、主要な道路や鉄道を別にして、ダレット計画の立案者は、ハガナの考えで“押収、掃討もしくは破壊される”ことになるアラブ人村の運命に関して決断を下していないし、全体の政策に指令はしなかったということである⁶⁹。アラブ政策は、戦場の指揮官とアラブ問題に関する現地の助言者によってか、もしくはBen-Gurionの側近グループに属し、その側近グループの上官に助言を行なった“アラビスト”によって現場で決断された⁷⁰。ダレット計画の目的は自衛的なものであり、アラブ人の差し迫る侵入に伴ってイギリス撤退後のパレスチナの後背地を確保することである。アラブ人村の占領は、侵入する敵が幹線道路の使用と近隣のユダヤ人入植

⁶⁵ Yoav Gelber, *Palestine 1948, Second, Revised and Expanded Edition*, Sussex Academic Press, 2006, p. 303.

⁶⁶ *Ibid.*, p. 304.

⁶⁷ *Ibid.*

⁶⁸ *Ibid.*, p. 305.

⁶⁹ *Ibid.*

⁷⁰ *Ibid.*, p. 306.

地を攻撃するための潜在的基地として利用することを阻止するために必要であった。すなわち、Gelberによればダレット計画はパレスチナ人が表現するようなイデオロギー的なものでもドクトリンでもなく、出現する脅威への現実的な対応であった。その計画の目的は、アラブ人の侵入に備えるものであって、アラブ人を追放することではなかった。

4. 考察

これまでに挙げた「計画的追放説」の主張を要約すると、ダレット計画について少なくとも次の点が見明らかになった。ダレット計画に基づくシオニストの行動は、ユダヤ人国家の領土とされた地域を確保してアラブ住民を追放すること、およびアラブ人のパレスチナとして国連分割案で約束された地域の特定の場所を占拠し住民を追放したということである。これらは、イスラエル国家の基礎たるべき軍事的既成事実をつくりあげるために目論まれたものであった。その原則は、次のようなものであった。それは、アラブ村がイスラエル部隊の立ち入りに抵抗した場合、村を完全に破壊し、全住民を追放する。そして無抵抗の場合は、武器、車両などをすべて押収し、疑わしい住民を拘留、ハガナの守備隊を送り込み、必要ならば村を要塞化するというものである⁷¹。つまり、アラブ市町村を恒久的に占領することを計画した疑いがある。しかし、MorrisやGelberの見解との対比のなかで浮かび上がってきた論点は、このダレット計画のそもそもの目的は何であったのかという点である。ダレット計画が軍事的で自衛のための活動であったのか、それとも政治的でイデオロギー的な活動であったのか。パレスチナ人の追放は戦争のなかで生じた偶発事件、あるいは付随的な事件なのか。それとも明確な意図のもとに系統的に遂行されたものだったのか。このことが大事な争点となったのである。

Morrisはダレット計画を、あくまで軍事的な作戦と見なしながらも、農村地域の支配と破壊を含んだ活動であるとした。彼によると、ダレット計画は自衛のための計画であり、アラブ人追放のための青写真ではないと断言する。このような意見に対して、Khalidiはダレット計画をパレスチナ人追放のためのマスタープランであると主張した。さらに、Pappeはダレット計画作成以前からパレスチナ人追放のアイデアがシオニストに内在していたことを強調している。彼ら3人はダレット計画によってパレスチナ人の難民化が促進されたことについては同意しているものの、ダレット計画のなかに追放のマスタープランが内在していたかについては意見の分かれるところである。特にMorrisとPappeのように「新しい歴史家」と称される者たちの間でも異なった解釈と意見の対立があることは注目すべきことであり、個々のスタンスに差異があることはこの問題の複雑な側面を表している。Pappeについて特筆すべき点は、パレスチナ難民の発生とシオニズム・イデオロギーの不可分性を主張したことにある。彼にとってダレット計画で促進された難民創出は1948年戦争のために生まれたものではなく、イスラエル建国やダレット計画立案よりもはるか前から、シオニストの思想のなかに存

⁷¹ 奈良本英佑『パレスチナの歴史』明石書店、2005年、147頁。

在したアラブ人を非存在化する排他性に起因するものである。すなわちユダヤ国家創設のためにはユダヤ人のマジョリティ化が政治的・軍事的にも不可欠であり、そのためにはパレスチナ人の追放さえもシオニストのなかで容認されていたということを明らかにしたのである。Pappeの主張の重要性は、パレスチナ難民創出を伴ったイスラエル建国そのものの正当性および原罪性までも問うたことにあった。このように、Pappeの主張は自国の加害責任を全面否定してきた主流派の「語り」からすると画期的であり、評価されるべきものである。

MorrisやGelberが述べるように、ダレット計画がパレスチナ人を追放するための青写真であったと断定することは出来ないかもしれない。しかし、シオニストが可能な限りユダヤ人のマジョリティを確立したうえでイスラエル国家の建国を望み、そのような思想の持ち主たちがダレット計画を立案していたとしたらどうであろうか。一部のユダヤ人入植地がアラブ兵に襲撃されていたのは事実であろう。そのため、ユダヤの兵士たちは軍事上、非常に重要な街道沿いにある村々に対してアラブ兵の攻撃拠点になることを阻むために破壊を実行した。これがどこまで全体的な意図を持って行なわれたかが問題となるであろう。Gelberが主張するように、イスラエル建国前にアラブ側からの大規模な攻撃計画があったのか、また、それはどのような内容を含んでいたのか、その計画の現実性がどこまで真実性を持っていたのか。これらのことが明らかとならなければ、ダレット計画が自衛のものであるかどうか証明できない。

Pappeについても問題は残る。シオニストの意図が明確にパレスチナ人の追放だったとしても、それ自体としては、一般的なイデオロギー、思想の次元に止まるものである。これが現実にはダレット計画立案の根底的思想になったのか否かを明らかにするためには、計画の策定プロセスが、さらに“実証的”に明らかにされなければならないだろう。しかしながら、Pappeの研究の意義は大きい。ダレット計画がシオニズムの追放の思考と深く関わっている可能性があることに多くの目を向けさせたからである。従って、今後の研究は、ダレット計画の軍事的・政治的背景を探るだけでなく、当時のユダヤ人社会の多くの思想潮流、特にシオニズムの思想の実態を明らかにし、それらが軍事的にどのような影響を与えたのかについて考察しなければならない。その意味において、思想史研究と政治史研究の接合こそが今後の課題であると言えよう。